

種名	山梨	長野	新潟	富山	石川	福井	岐阜	愛知	京都	大阪	兵庫	岡山	広島	山口	徳島	香川	高松	愛媛	高知	福岡	佐賀	長門	熊本	鹿児島	沖縄
イチョウ																									

5. 選定巨木種の分布と語源・由緒

A. 全国 の 部

1. イチョウ *Ginkgo biloba* L.
 - 1) イチョウは系統発生的には古い樹木で、その出現は地質では古生代の二疊紀で、中生代のジュラ紀には北半球の各地で繁茂していた。その当時の地質時代(およそ1億年前)から現在と同一の特徴を保ち続ける生きた化石植物である。この植物が衰退した原因は、その後、新生代の第三紀に北方から氷河が襲来し、気候は次第に寒冷となり、イチョウ属も枯死し、化石を遺すようになった。しかし中国の一部では気候が温暖であったため、そこのイチョウは死滅を免れ、生育を続けて現在に及んだと推定されている。
 - 2) イチョウは雌雄異株で、花や果実のない時期にはその鑑別は困難で、巷間に次の説がある。
 - ① 苗木時代に雌株は雄株より小形で、葉は小形、裂刻少く、横枝が多く、黄葉の時期が早い。
 - ② 老木では雄株は乳状突起の担根体(ヤマノイモの食用部と相同)が雌株より多い。
 - ③ 成木の雄株の枝は立ち、雌株の枝の開度は大きく、横にひろく拡開する。
 - ④ 雄株の葉は雌株の葉より切り込みが多い。
 - ⑤ 苗木(高さ0.6 m程度)の根、雌株に突起あり。
 - ⑥ 雌株を生ずる種子の形は丸味で2稜、雌株を生ずる種子の形は、細長味で3稜である。
 - 3) イチョウの葉形は葉片、葉縁、葉脚、葉柄の形によって、次の4系統に分類される。

④葉脚直線—①葉縁微鈍鋸齒、②葉縁二分岐 ③葉脚鋭角—③葉縁不斉鋸齒、④葉縁多裂
 ⑤葉脚鈍角—⑤葉縁全縁又は細鋸齒、葉縁二分岐又は多数粗大鋸齒 ①葉片非対称
 - 4) イチョウの語源なり、漢字にはいろいろある。①一葉(葉が1片なので)からの転化、②「鴨脚樹」は葉形が鴨脚に似ている、中国語で「ヤチャオ」の転化、③「公孫樹」は公が植え、孫の代に結実するとの意味、④「銀杏」は果実が小型のアンズで、銀色から。宋語で「ギンアン」の連声で「ギンナン」と、GinkgoはGinkyoの誤りと考えられる。
 - 5) イチョウの由緒について、次のような古い歴史が刻みこまれている。①イチョウは位が高く在家に植えると貧乏するといって植えない慣習がある。②神社、仏閣には必ず植えられ、愛護されたため、古樹・巨木として国の天然記念物にたくさん指定されている。③この化石植物が大自然の幾多の猛威に耐えてきた特性としてあげられることは、外皮のコルク層が発達していて、外部からの攻撃に対し強い。また保水力が豊富であるため、大火のさいに防火の役を果し、各地に「水噴き公孫樹」の伝説がある。さらに乳柱と切断の樹液が母乳信仰となり、神木となっている。江戸時代は扇形の葉は庶民に愛され、これに因む髪型まで流行し

た。

2. イチイ *Taxus cuspidata* Sieb. et. Zucc.

- 1) イチイの分布は北海道、本州、四国、九州（鹿児島の高隈山の南限）—温帯上部から亜寒帯にわたるので、アジア東北部（中国東北部、ウスリー、シベリア、朝鮮、サハリン、千島）まで生育、本州では山形県、長野県や東北各県の高山地域、北海道では特に多く自生している。
- 2) イチイは雌雄異株で、雌花は前年生枝の葉腋に単生して結実する。赤熟の仮種皮は甘い。イチイの変種キャラボクは日本海側各県の深山に自生する。北限は秋田県の鳥海山で、富山県では、僧ヶ島、白木峰、金剛堂山、三ヶ辻山、人形山などに自生している。鳥取県の大山には「ダイセンキャラボク」が有名である。イチイは生長が遅く、樹高7～8mに及ぶには500年を要する。
- 3) イチイの語源は、飛騨の位山から伐り出した材で笏の材料としたところ優れているので、この木に「正一位」という最高の爵位が授与されたことから「一位」と呼ぶと、またキャラボクは、この材はわずかに芳香を発するが、この香気はインドやビルマに産する著名な香木、伽羅に似ていることから名づけられた。
- 4) イチイはアイヌ語で「ラルマニ・フレップ・アエッポ」（我等の食う小さいもの）、または「クネニ」（弓になる木）と呼び弓や染料の材料として珍重した。キャラボクは昔から庭樹として植えていると、疫病を除く縁起のよい樹木とされてきた。

3. カヤ *Torreya nancyera* S. et. Z.

- 1) カヤの分布は、本州（山形県鳥海山、宮城県御岳は自生北限）の表日本側、四国、九州（屋久島は自生南限）、裏日本はチャボガヤとなる。
- 2) カヤは雌雄異株、雄株は枝が上向して丈は高い。雌株は枝が拡開して丈が低い。寺院内に多いのは採油のために植付けたものとされる。
- 3) カヤの語源は古代にはイヌガヤとともにカヘと呼び、「和名抄」にはカヤには栢、イヌガヤには柏の漢名をあて、和名には前者に加倍、後者に加閉と記載されている。これは朝鮮語のKai-pi が日本語に転じてカヘに転じたものか。「日本主要樹木方言集」（倉田 慎著）では五畿内・阿波ではヘベ・ヒビ・ヒョービ、京都ではヘーベ、中部ではヒョウブまたはヒョービ（富山県の山村ではハイイヌガヤをヒョウベ、ヒョウビ）、東北地方ではショウブ・ソブノキ、越後ではヒョウミと呼んでいる。

- 4) カヤの由緒については高僧がカヤの種子製の珠数の穴と関係づけて流布したツナギガヤ、ヒダリマキガヤの伝説が新潟県、富山県にある。イヌガヤ油は灯油として、カヤ油は食用油として珍重され、またカヤの種子は炒って食用とされた。

4. モミ *Abies firma* S. et Z.

- 1) モミの分布は秋田、岩手両県以南の本州、四国、九州の山地及び屋久島がその南限である。太平洋側では連結的に分布するが、日本海側では能登半島以東では産地が隔離する。
- 2) モミより海拔の高い地帯にウラジロモミ、これとモミの接触地帯に雑種のミツミネモミがある。
- 3) モミの語源は朝鮮に分布するトウシラベ (*A. nephrolepsis*) を朝鮮語では、Munbiと呼ぶが、これに由来するものか、樅の漢名は、中国語では冷柳を指す。
- 4) 「万葉集」の山部赤人の詠んだ「臣の木」をモミに当てているが、現在も異論がある。
- 5) モミの由緒については、昔は、モミとツガとを同一と考え、能登ではモミをツガと呼び、また富山県ではモミをトガと呼び、家運の隆昌を祈念して、屋敷林の中に1～2本植え、その巨大さによって家の格式を誇る風習があった。太い枝を四方に伸ばした樹幹が亭々とそびえ立つ姿に、種独特の風格と気品、それに力強い逞しさに家運の隆昌をあやかっていたものか。

5. マツ アカマツ *Pinus densiflora* Sieb. et Zucc.

クロマツ *Pinus Thunbergii* Parl.

- 1) クロマツは一名オマツと呼び、樹皮は灰黒色、葉は強剛で濃緑色、全景は男性的である。
- 2) クロマツは一名メマツと呼び、樹皮は赤褐色、葉は細くて、軟らかく淡緑色、女性的である。
- 3) クロマツは乾燥と湿気に強く、また潮風に対する抵抗力もあるので、海岸沿いに自生する。また防風、防潮林として植栽されてきた。本州、四国、九州、朝鮮南部に分布するが、垂直的には、気候の温暖な地方ではアカマツと同様に山地に分布し、北に行く程、海岸からの分布区域の幅を縮小している。
- 4) アカマツは完全な陽樹で、土壌に対する適応性が広く、強い乾燥地や岩壁、岩場あるいは伐採跡、ガラ場、崩壊地のやせ地にも生える。分布は南の九州から北海道の南部まで、山野に広く生え、また植林も行われる。弥生時代になって、急激に繁茂した傾向がある。
- 5) マツの語源には、古来いろいろな説がある。①神が天から降るのを待つ木、②祭木（まつりぎ）が転じたもの、③葉が二股になっていることから股がマツとなるとか。

6) マツの由緒については、①具原益軒著「花談」一元禄11年(1698)刊一には「松は石木の長なり、畏木に優れて千年の齢を保ち、霜雪をおかし、日時常に緑なり、歳寒の操ありて君子の徳にも比せり」とある。

7) 瑞祥植物としてのマツ、①正月の床の間や慶来に飾る松・竹・梅は、先ず松は長寿・家運の繁栄、竹は子孫繁栄、梅は君子の徳をあらわす、②古代中国思想では松は魔を払い、幸福を招く植物とされる、③門松はもともと歳神の降臨を迎えるための依代として立てたもの。

8) マツにまつわる伝承は、①病魔除けの松一病災を払う松、松の絵馬、夜泣き止めの松、歯痛どめの松、腹痛止めの松、乳出す松、咳止めの松、眼病治しの松、③崇る松など多数ある。

6. ヒノキ *Chamaecyparis obtusa* Endlicher

1) ヒノキの分布は北は福島県赤井岳を北限とし、南は九州屋久島まで。木曾のヒノキ、秋田のスギ、青森のヒバは日本三大美林で、その一つにあげられている。

2) ヒノキの語源は火の木とか、神火は今もウツギの杵にヒノキの白を用いる。しかし「日本書紀」に「^ひ桧ハ以テ^{みすのみや}瑞宮ノ材トスベシ」とあるように尊い木で、ヒは最のものを表す句に基づくもので、霊に通ずる不思議な力を持った樹木とする説もある。

7. スギ *Cryptomeria Japonica* D. DON

- 1) 真正の葉を欠き、仮葉がなくなると落枝する。
- 2) 樹形は側面より弱光が入り易い。
- 3) 仮葉の晩秋に紅葉するが、春には緑葉となる。
- 4) 北は北海道より、南は九州屋久島まで分布している。
- 5) スギ層はスギ一種のみで、日本を代表する固有種。

スギの系統には次の2説がある。

- ① 多系統説—日本海側産をウラスギ、屋久島産をヤクスギ、太平洋側産をオモテスギとの3変種に村井氏(1962)は分類する。従来のスギの学名をオモテスギ、アシウスギの学名(*U. randicans*)をウラスギに中井氏(1950)はあてている。
- ② 単系統説—遠山氏(1976)は天然生スギの葉型調査の結果、北から南に向かって葉の着生角度が連結的変異することから、オモテスギとウラスギは遺伝的形質の相違ではなく、立地環境によるものとしている。暖地系と寒地系では次の特性がある。

	暖地系スギ	寒地系スギ
枝	弱く、粗生、幹に対して上向	剛直、密生、下向、枝端は下垂
葉	枝部より45度以上開き、真直で先端針状	太く、開度少く、内曲し、刺端ならず

6) 富山県のスギ系統

(1) 寒地系 ①タテヤマスギ—多雪地帯に生育する地スギの総称で、今日でも河内スギ(大山町)、早月スギ(上市町)、黒部スギ(宇奈月町)、美女スギ(立山町)、吉谷スギ(婦中町)、マサヤマスギ(福岡町)はさし木による。

(2) 暖地系スギ ボカスギ(小矢部市、高岡市)、宮島スギ(小矢部市)、了輪スギ(小矢部市)

7) スギの起源については、山崎氏(1943)や竹岡氏(1970)の泥炭層の花粉分析によって、日本には新世代第三紀から分布し、温暖な間氷期には、日本列島を水平的に北上し、垂直的にも高い地域に分布拡大したが、寒冷な氷期になると南下あるいは平地の温暖地に集結、退避の繰り返しによって生き残っている残留植物の一つである。

8) 「大和本草」に「杉、木直ナリ、故ニスキト云フ」と直木(スクキ)から、漢名の杉は誤用、中国ではコウヨウザンを指す、(2)大和本草批正に「杉赤をアブラスギ、白をシラタ、鬼杉は木ねじれ、木理ゆがみ、板にして木理美にして上品なり」、(3)杉材の酒樽は酒の香気を増す、酒戸の軒端にスギ玉をかかえて商標となす、(4)古来よりスギの巨木は神の宿る神杉として崇敬した、(5)吉凶を占う矢立杉もその信仰を示す、(6)縄文、弥生時代の森林文化における各種の用材、屋敷の防御林にいたるまでスギが中心であった。

8. ブナ *Fagus Crenata* Blume

イヌブナ *F. Japonica* Maxim

1) ブナの分布は北海道(後志以南)、本州(中部では標高500m~1,500m)、四国、九州の温帯に生育し、日本固有の夏緑広葉の高木である。

2) イヌブナの分布は本州(岩手県以西)、四国、九州の山地で、ブナよりも低部に生育するが、中部地方以北の日本海側には生育せず、暖帯林の上部から温帯林の中部まで分布する。

3) ブナの形態は、①樹皮は灰白色、別名シロブナ、成葉は無毛、総苞は果実の長さと同長。

4) イヌブナの形態は、①樹皮は灰黒色、別名クロブナ、成葉の下面長白毛、総苞は果実より短い。

5) ブナの語源については不明である。古名はソバ、ソバノキと呼ばれ、果実がソバに似ているので、ソバグリの別名がある。撫、掬の漢字をあてるが、日本の俗字である。イヌブナは材

質がブナより劣るからである。

6) ブナの由緒については、最近、日本のブナ林文化として注目を浴びてきたが、日本の冷温帯林を代表し、四季の変化は日本人の美意識を培い、深雪地帯では雪崩防止林として、また果実の豊富な時には炒って直ちに食用にでき、石臼でひき香煎にする山村もある。

9. ナラ *Quercus serrata* Thunb.

ミズナラ *Q. mongolica* F. var. *grosseserrata* B.

1) ナラの分布

(1)コナラは北海道南部、本州、四国、九州の低山地に生育し、ミズナラよりも低地、また、朝鮮にも分布する。(2)モンゴリナラは北海道、本州の中部以北の温帯山地、また、東シベリア、東モウコにも分布する。(3)ミズナラの母種との区分点は、

①葉は鋭頭、②葉緑の牙齒はやや鋭頭、③殻斗のリン片の隆起は母種より著しくない。母種の樹皮は、粗大な割目と凸凹が多い。

2) ナラの語源は、①奈良の地に多いので、奈良の木と呼ぶことから、②ナメラ葉(滑ら葉)に由来するとの説などがある。漢字の榎は日本の俗用字、ミズナラは材に多量の水分があって、燃えにくいから、オオナラは樹木が大きくなり、葉が大きく、葉柄がない。

10. イチイガシ *Quercus gilva* Blume.

1) イチイガイの分布は、本州(関東南部以西)、四国、九州—台湾、中国の暖温帯地方。

11. スダジイ *Castanopsis cuspidata* var. *sieboldii* N.

1) スダジイの分布は、本州(福島県、新潟県以西)、四国、九州、朝鮮(済州島)などで、日本の照葉樹林を代表する一つの樹種である。二つの樹種が同名で呼ばれるが、ツブラジイは女性的でコジイ、男性的なイタジイ、ともに種子は食用にされる。

12. ハルニレ *Ulmus davidiana* planch. var. *japonica* N.

- 1) ハルニレの分布は、北海道、本州北部、東シベリア、中国北部、朝鮮、千島に生育する。
- 2) ハルニレの語源は、①ニレは滑れ(ヌレ)の意味で、皮をはがすと、樹皮の下の液が粘滑であるから、古名ヤニレと呼ぶ、②アイヌ語ではチキャニ「火をこすりだす木」の意味である。
- 3) ハルニレの由緒は、アイヌ民族の神話では、人間の祖先であるアイヌラックルはハルニレ

姫から生まれ、アイヌ民族の守り神となった。ハルニレ姫はこの子を育てるためにニレの白皮で食物を、繊維で着物、木材で家屋をつくるなど、生活のすべてをまかなう重要な尊い樹木であって、神が人界に授けた有難い樹木としている。

13. ムクノキ *Aphananthe aspera* Planch.

1) ムクノキの分布は温暖地方で、本州(関東以西)、四国、九州、朝鮮、台湾、中国に生育している。

2) ムクノキの形態は、エノキに似ているので、昔からよく混同された。区別は次のことで判定できる。

①ムクノキの葉の鋸歯は基部まで、ほとんど同形であるが、エノキは葉縁は半分以下が全縁である。②ムクノキの葉脈は、その先端が鋸歯に達している。③ムクノキの葉脈は基部で3脈となる。④ムクノキの果実は黒熟するが、エノキは赤熟する。

3) ムクノキの語源には、次のような説がある。

①実黒が転化してムクとなる。②むくの意味で、ざらざらした葉で磨きはがすから。③木工は木を使って家を作る人を呼んだが、ムクノキの材は造船などの他に広く使われ、またその葉が木材の加工になくはならぬものだったので、木工の木と称して重用視したが、これがそのまま樹名になったものか。

漢名の樸樹、槲葉樹、加條は慣用名で、椋は別種である。椋の漢字にあたる本来の植物は松楊(むらさき科のチシャノキ)で、その木陰が涼しいので椋の字を用いると中国古代の辞書「爾雅」に記載されている。チシャノキの葉がムクノキの葉に似ていることから椋を誤用したとも考えられる。

4) ムクノキの由緒については、昔からエノキと混同されムクノキと呼ばれた。神社の神木をエノキとあがめられている中に、ムクノキであるものもある。諺に「榎の実ならばなれ、木は椋の木」「椋になっても木は榎」とある。

14. ケヤキ *Selkoua serrata* Makino

1) 大木となり、樹形は直立した樹幹の上部が扇状に開く。東京のケヤキ、パリのマロニエ、北京のシナエンジュ、モスクワのシラカンバなどは旅さきで植物の偉容を印象づける一つである。

2) ケヤキの分布は、本州、四国、九州、台湾、朝鮮、中国の温帯および暖帯におよぶ。

3) 谷間の肥沢地に生育する。

- 4) 深根性で、耐風力が強いので、屋敷林として栽植される。
- 5) ケヤキの呼び名は、十六世紀初めごろの「饅頭屋本節用集」にケヤキ（榿）とあり、室町時代前後から用いられた。この語源は「和句解」松永貞徳著に「木目が美しきにつき、ケヤキ木といい、これがケヤキとなる」とある。ケヤキは元来、尊いと、秀でたという意味で樹勢の秀でているためか。
- 6) 古い時代にはツキ（槻）と呼ぶ「古事記」一槻「万葉集」一斎槻「記紀」一槻弓とあり、この語源を「和訓栞」では強い木とある。尊い木の意味の斎木（つは助詞）の転化か「万葉集」の延槻川は現在の早月川であるが、ケヤキが河畔林として帯状に生えていた光景が偲ばれる。
- 7) 漢名の榿は中国でシナサワグルミ（くるみ科）、槻はコバンモチ（ほととぎす科）である。
- 8) 用材としてのツキとケヤキは別とする地方。
 ①ケヤキは木理が縦に通る、ツキは横にからまる木節もあり、ねばり強し。②ツキは樹皮がなめらかで、葉面はあらい。ケヤキは樹皮に横の切れ目ができ、表面はなめらか。③ツキは樹が高く、横に枝を張る。ケヤキは素直に伸びる。④アカケヤキ—心材が赤、肥沢地に生育、葉は大型、アオケヤキ—心材は黄、河畔の崖に生育、葉は小型、枝はねばい、用材はおごる。⑤ツキゲヤキ—赤くて良材、アオゲヤキはイシゲヤキともいって、材は白くて堅く、乾燥すると狂いがでて割れる。⑥紀伊藩の畔田伴存著「古名録」に「榿ニコット云ハ上品紅質ノ材ヲ云、其中品ナルヲ半コット云、上品ナルヲ本コットハ材柔カ也」と、以上のように現在でも民間でケヤキ材を使用するさいには、材質によって2種に区別されている。今日の植物学では、この差異をあまり重視していないが、大いに究明する必要がある。
- 9) 「万葉集」に斎槻とあるように、老樹は神木として古代より尊ばれてきた。
- 10) 中世における木の市民文化はケヤキ材によって築かれた。神社、仏閣はもちろん豪壮な民家も総ケヤキ造りが一つの仕来りであった。ケヤキは、私たちの生活に木材資源を提供してくれるはかりでなく、風土の四季をいどる心象風景として、豊かな美の森をつくってくれた。このケヤキの老樹など「樹という樹には、たましいがある」と叫ぶ最高潮の姿を見出し出してくれる。

15. カツラ Cercidiphyllum Japonicum S. et. Z.

- 1) 第三紀には日米両国に広く分布していたが、米国では絶滅し、現在は日本のみである。
- 2) カツラの分布は、北海道、本州、四国、九州の温帯の山地、溪谷に生育している。
- 3) 形態の特徴は、①雌雄異株、②裸花（がく、花弁なし）③長枝の葉対生、短枝は1側。

- 4) カツラの語源は、カツラのカツは香出（カツ）から由来する。「古事記」には湯津香木と記す。宮城、山形、福島、新潟の各県ではコウノキ（香ノ木）、その他マツコウノキ、オコウギと呼ぶ地方もある。また醤油のにおいからショウユギ、ミソノキと呼ぶ地方もある。
- 5) 葉を乾燥し、粉末にしたものを抹香（まっこう）や線香の材料にする。
- 6) 崖泉の湧出する個所に巨木が見られ、カツラは水を引くと伝えている。

16. アコウ Ficus wightiana Wall.

- 1) アコウの分布は、本州（和歌山県では由良町）、四国の足摺岬、九州の太平洋沿岸の一部、琉球、台湾、中国南部、インドシナ、タイ、マレー半島までの熱帯に生える。
- 2) アコウの形態
 ◎アコウとガジュマルの類似点—①ガジュマルと同じく幹から多数の気根をたれ下げる、②両者は樹皮を傷つけると乳白色の液を出す、③両者の実はトリが食べて糞を樹上に落とし、やがて宿主の幹を網状に巻いて枯死させ、地面に達していた気根が根上がり状に空中に残って樹林を形成するので、絞殺木と呼んでいる。
 ◎両者の相違点—①アコウは雌雄異株、他は雌雄同株、②アコウは春、全部落葉し、間もなく新葉を出す、③アコウは5月頃、枝や幹球形の球形の花を一面につける、④花のうは温紅白色、ガジュマルは帯黄色に熟す。
- 3) アコウの語源は不明である。愛媛県にアコギの地名がある。これを地方ではアコウと呼ぶ。漢名は雀榕、乾葉を焼くと香を発するので、沈香木とも記す、榕樹はガジュマルを指す。
- 4) アコウの由緒については、①ジャワでは聖木とし、Waringin と呼び、庶民崇拜の樹木としている、②愛媛県三崎市のアコギでは「仏の木」と呼んでいる。これらは、この樹木が防風樹として、また緑陰樹として、住民との深いかわりをもってきたためか。

17. クスノキ Cinnamomum Camphora Sieb

- 1) クスノキの分布は、本州（関東以西）、四国、九州、中国、台湾などで、亜熱帯から暖温帯を生育圏とし、四国、九州の、おおむね神社の境内に植えられて、巨木となっているものが多く、天然分布では、霧島山標高500m、雲仙岳標高380mがあげられる。
- 2) クスノキの品種は、次の4種に分けられる。
 ①アカグス—葉は大形、薄質、葉柄は淡紅色で長い、②アオグス—葉は円味、厚く、葉柄は短い、生育は旺盛、③ボケグス—葉は前者より長く、薄い、④サンショウグス—葉幅は狭く、長い、材の新しいものはサンショウの匂がある。

3) クスノキの語源の諸説は、次の通りである。

①南方語の由來說—マレイ語で香りのことをラカイRakai, 台湾の高砂族はクスノキをラクスRakas, このRaを除くとkasとなる。またアイヌ語では“匂う”をrakといい、すべて同系語で、民族移動の方向を示す意味深いことばである。②「和訓栞」によれば、奇しきの意味からでたもので、石化して樟脳を出すからという。③漢名は樟で、オウショウ(芳樟)はクスノキの1亜変種で、台湾、中国に分布している。④楠は中国の四川省にあり、わが国には分布していない。

4) クスノキの由緒には次の如くいろいろあげられる。

①樹齢は長く、巨大なる樹木であるため樹幹は重量感があり、生命の躍動的な強烈さを感じられ、各地で神木として崇教されている。③播磨国風土記逸文に「……すなわち、そのクスノキを伐りて舟をつくるに、そのはやきこと飛ぶが如く、ひとかじに七浪をゆき越えき。よりて速鳥となづく」とあり、「日本書紀」にもクスノキの用途として浮宝(舟)とすべしと記述されている。古来より人との結びの強い樹木である。

18. タブノキ *Persea Thunbergii* Kostermans

1) タブノキの分布は、本州(関東及び中南部)、四国、九州、小笠原、八丈島、琉球、台湾、朝鮮、中国などの暖い海岸地方にあって、暖帯林構成の主要な樹種で、豪壮な巨木となる。

2) タブノキの語源は、日本各地で樹霊信仰の対象となっていることから「霊の木」か、あるいは葉や樹皮に著しい粘質物が含まれ、線香の粘結剤にすることから「保つ木」であるのか、九州では粘質のイヌビワをタブと呼ぶ、タブノキ、タモノキ、タマノキと一連の名称語源となっている。

3) ツママ説は「万葉集」に大伴家持が氷見で詠んだ歌にある巨木で、東蝦夷物産志にある蝦夷の方言ツママはイヌツゲである。福井県の国指定に「小浜神社の九本ダモ」がある。

19. サクラ *Prunns* Spp.

1) ヤマザクラ群

(1) ヤマザクラ *P. jamasakura* Sieb, の分布は、本州(太平洋側は宮城県、日本海側は新潟県以南)、四国、九州、対馬、屋久島、種子島、さらに済州島などで、暖帯から温帯にわたる。国指定のヤマザクラは、①大戸のサクラ(茨城県)、②金剛ザクラ(栃木県)、③松月寺のサクラ(石川県)、④揖斐二度ザクラ(岐阜県)、⑤中将姫誓願ザクラ(岐阜県)、⑥狩宿の下馬ザクラ(静岡県)

(2) オオヤマザクラ *P. sargentii* Rehd, の分布は、北海道、本州(日本海側は島根県三瓶山、広島県冠山、山口県寂地山峡まで、太平洋側は岐阜県以北)、四国(石鎚山脈)、樺太、南千島など、温帯から亜寒帯まで、国の指定は、極楽寺の野中ザクラ(新潟県)

2) ヒガンザクラ群

(1) エドヒガン *P. pendula* Maxim, *yorm. ascendens* onwi の分布は、本州、四国、九州、韓国、中国中部、台湾などで、丘陵帯や低山帯、国指定は、①盛岡石割ザクラ(岩手県)、②伊佐沢の久保ザクラ(山形県)、③馬場ザクラ(福岡県)、④石戸蒲カバザクラ(埼玉県)、⑤山高神代ザクラ(山梨県)、⑥素桜神社の神代ザクラ(長野県)、⑦根尾谷溪墨ザクラ(岐阜県)、⑧樽見の大ザクラ(兵庫県)、⑨臥竜のサクラ(岐阜県)、

(2) エドヒガンの枝の垂れた品種として、①三春滝ザクラ(福島県)、②常照寺の九重ザクラ(京都)、醒井の不断ザクラ(滋賀県)

(3) エドヒガン系とヤマザクラ系の自然交雑のサクラ ①三隅大平サクラ(島根県)

(4) オオシマザクラ *P. Speciosa* Nakaiは東南列島に自生する。この園芸品種がサトザクラ *P. donarium* Sieb, である。国指定は、①大島の桜株(東京都)、②塩釜神社の塩釜ザクラ(宮城県)、③梅護寺の珠数掛ザクラ(新潟県)、④小木の御所ザクラ(新潟県)、⑤兼六園の菊ザクラ(石川県)、⑥白子不断ザクラ(三重県)、⑦照源寺の金竜ザクラ(三重県)、⑧知足院のナラヤエザクラ(奈良県)、⑨大村神社のオオムラザクラ(長崎県)

3) サクラの語源については、次の諸説がある。

①木花之佐久夜昆売の美神が日本の諸木の花の代表として、サクヤがサクラに転化、②木の皮が自然に横にサクル(裂ける)から転化、③咲き映える咲映の転語などがある。

4) サクラの由緒については、「万葉集」の詠んだ歌はウメは119首、サクラは44首、当時は唐文化輸入のウメに関心が深く、御所にヤマザクラが植えられたのは天徳四年(960)奈良、平安時代からサクラの文学的観賞価値がたかまって、江戸文化を形成する。

20. トチノキ *Aesculus turpinata* Blume.

1) トチノキの形態の特徴は、七裂の掌状複葉と春の枝の先きに多数の白花をつけた円錐花序、秋のクリ状の赤褐色の種子が、果皮がらが裂開して果実が落下する。この種子を古代から食用としてきた。

2) ヨーロッパ都市の街路を飾るマロニエの並木、トチノキに似ているが果皮にトゲがある。この葉柄の跡が樹皮に馬蹄形を残すのでホースチェスナット(馬栗)とも呼ぶ。

- 3) トチノキの分布は、北海道、本州、四国、九州の山地で、湿気、排水、肥沢地に生育する。
- 4) トチノキの語源は不明で、漢名で天師栗、七葉樹と書くは誤りで、椽、枅などは俗用字である。
- 5) トチの種子は、以前には山村の重要な救荒食品であった。トチ餅が主で、トチ麺はめん棒を早く使わないと冷えて固まるから「トチメンボウ」は、あわて者の名詞となった。

B. 富山県の部 (全国選定巨木種を除く)

21. ラカンマキ *Podocarpus macrophyllus* var. *Chinensis* (Roxb.) Maxim.
 - ① 分布は中国の産、但し確認されず、九州、沖縄の自生説もある。
 - ② 種子の形を羅漢にたとえ、ラカンマキと呼ぶ。漢名は羅漢松、イヌマキにもこの漢名を当てることが多い。イヌマキの分布は千葉県の房総半島以南、四国、九州の太平洋岸に多い。
 - ③ 両者とも雌雄異株で、マキの語源は円木あるいは真木などの説がある。
 - ④ 両者とも細根には菌根があり、栽培は容易であるため、庭木、生垣に、公害にも強い。
22. カラマツ *Larix leptolepis* Murray.
 - ① 日本特産の樹木で、本州中部の亜高山帯の乾燥山地に分布、南千島、サハリンにはグイマツ。ヨーロッパにはヨーロッパカラマツが分布している。
 - ② 唐松は全体的な樹形による。漢名の落葉松は正しくない。富士松は産地による。
23. ゴヨウマツ *Pinus parviflora* S. et. Z.
 - ① 北海道南部、本州、四国、九州の山地に分布、本県でも標高600mあたりに分布する。
 - ② クロマツ、アカマツの二葉に対し、五葉からなるマツで、昔から日本の中部、南部で呼ぶ。
24. コウヤマキ *Sciadopitys verticillata* S. et. Z.
 - ① 日本特産の樹木で、本州の紀伊半島から四国、九州の山地に分布、長寿の樹木である。
 - ② 樹種名は紀州高野山に多い理由による。
 - ③ 水湿に強く、樹皮は漏水をふさぐに使用する。
25. アカガシ *Quercus acuta* Thunb.
 - ① 本州(宮城県、新潟県以西)、四国、九州の山地に分布、朝鮮南部、中国に及ぶ。
 - ② アカガシは材の色に基づく、粗大な樹形からオオガシ、オオバガシとも呼ぶ。
26. ウラジロガシ *Quercus stenophylla* Makino.
 - ① 本州(宮城県、新潟県以西)、四国、九州、沖縄の山地に分布、済州島、台湾に及ぶ。
 - ② 日本名は葉の裏が特に白色であることによる。

27. エノキ *Celtis sinensis* var. *Japonica* Nakai.
 - ① 本州、四国、九州の平地、丘陵地に分布、母種は中国南部に自生する。
 - ② 日本名の意味は不明で、古名はエ、漢字の榎は和字で、夏の樹陰が好まれるためか。
28. プラタナス *Platanus orientalis* L.
 - ① アジア西部、ヨーロッパ南東部に分布するが、明治初期に街路樹として植える。
 - ② スズカケノキの語源は山伏の法衣の篠懸からきたものか。
29. イヌザクラ *Prunus buergeriana* Miq.

ウワミズザクラ *P. Gragana* Maxim.

 - ① 本州、四国、九州の暖帯から温帯域に自生するが、富山県ではイヌザクラは見られない。
 - ② 県下ではウワミズザクラが自生するが、区別点はイヌザクラは、①花序の蓋部に葉がない。

◎枝は灰白色、◎葉形はやや狭、長だ円形、表面に微毛がある。
30. アオナシ *Pyrus hondoensis* Nakai et kikuchi
 - ① 本州(群馬県以西)、四国に分布、母種 var. *ussuriensis* は東亜温帯に。
 - ② 果実の表皮が緑色を帯びているためか、小形で、降霜後に食用となる。
31. サイカチ *Gleditsia japonica* Miq.
 - ① 本州(中部地方以西)、四国、九州の山野、川原に自生、豆果は石鹼の代用、栽植する。
 - ② 語源は古名の西海子(サイカイシ)の転化したもので、漢名は皂莢をあてる。
32. カエデ(イロハカエデ) *Acer palmatum* Thunb.
 - ① 本州(福島県以西)、四国、九州の山地に分布、ヤマモミジは中部以北の山地に自生する。
 - ② 葉の裂片が七つ数えることによる。漢名の楓、槭樹は誤り。
33. シナノキ *Tilia japonica* (Miq) Simonkai.
 - ① 北海道、本州、四国、九州の山地に生育する。
 - ② 樹皮がシナシナするから、その皮が白いのでシロから、アイヌ語ではジナは結ぶの意味。
34. サルスベリ *Lagerstroemia indica* L.
 - ① 中国南部原産で、江戸期以前に渡来したものとされている。
 - ② 樹皮のツルツルして滑らかなことから、また百日紅は花期が長く百日にわたる意による。
 - ③ 門わきに、縁起植物として植え、一家繁栄と厄除けの呪いとする。

35. ツバキ ①ヤブツバキ *Camelia Japonica* L, var *Spontenea* Makino.

②ユキツバキ *C. Japonica*. var *decumbens* Suyimoto.

③ユキバタツバキ *C. Japonica* L. var *intermedia* Tuyama.

1) ヤブツバキ—花は半開性、花糸は白色、東北地方では海岸地帯に生えるが、暖帯地域では標高600m~1,000m高地にも生える。本州、四国、九州、屋久島、朝鮮南部、済州島に分布する。本県では新潟県に接する海崖では50m、氷見地方では標高200mまで。

2) ユキツバキ—花は平開、花糸は濃黄色、分布は本州の温帯の下部で、日本海側の秋田県から滋賀県北部までの多雪地帯、富山県では標高300mより1,400mまでの山地。

3) ユキバタツバキ—花はヤブツバキとユキバタツバキの中間型、花糸は赤色、両者の接触地域に分布し、八重咲きもある。現在の大部分の品種群の系統は、この中間型から育成。

4) モクレン科などの原始的種子植物との近縁性を持つ。

①地史的には沖積期(約1万年前)以後の温暖期から、極めて短期間に分化し、生育範囲を拡大した傾向がある。②分布は水平、垂直的に巾が広く、温度、湿度に強く、適応性を持つ。

5) ツバキの語源は、アツバキ(厚葉木)、ツヤバキ(艶葉木)、ツヤキ(光沢木)、ツヨバキ(強葉木)、朝鮮語のTon-baikの転化などの諸説がある。

①椿は国字で、「古事記」「万葉集」にもこの漢名で記されている。②ツバキは古代では神聖な樹木であった。「古事記」に“ゆっ真椿”の語がある。これは斎っ、つまり神聖な尊いツバキを意味する。③椿は中国ではせんだん科のチャンチンを指す。④中国の隋や唐時代ではツバキを海石榴と記す、西域からのザクロに対し、海のかなたにある日本から渡ってきたザクロに似た樹木を示す。日本でも、万葉集に海石榴市の漢名が記されている。⑤ツバキの灰は媒染剤とし、当時使用された。「紫は灰さすものぞ 海石榴市の八十の衢に逢ひし児や誰」海石榴市は現在の奈良県桜井市にあって古代の交通要路で、歌垣の場所でもあった。当時ムラサキ染の発色にツバキの灰が媒染剤として使用された。⑥中国では現在ツバキを山茶、日本ではサザンカを山茶花と記すが、中国ではサザンカを茶梅と記す。⑦ワビスケはチャとヤブツバキの雑種といわれている。

6. 日本樹木の古代からの変遷

日本列島の植物分布は、よく似た植物の分布している地域を地理的にまとめて38植物区系にまとめているが、その中の東アジア(日華)植物区系に属し、北半球ではもっとも植物の豊富な地域となっている。われわれの祖先が古代からどんな樹木を利用して生活していたかを遺跡の発掘調査資料やその他の文献を辿って、あきらかにしていくことにする。

1) 福井県鳥浜遺跡の6,500年前の出土木材の土木建築材にはカシ、ヒノキ、クリ、スギ、ケヤキなど—安田喜憲著「環境考古学事始」

2) 静岡市登呂遺跡の2,000年前の弥生式文化時代の出土製品の95%はスギ、その他、ヒノキ、イヌマキ、サクラ—遠山富太郎著「スギのきた道」

3) 中国の「魏志倭人伝」(弥生時代後期の三世紀)には、わずか三十数文字ながら邪馬台国に生育する植物が次の如く記載されている。「其木有柳(タブ)、杼(コナラ)、豫樟(クスノキ)、栲(クサボケ)、榧(クスギ)、楸(カヤ)、榲(カシ)、為号留(カカツザユ)、楓出(カエデ)、其竹、篠(ササ)、箬(ヤダケ)、桃支(シュロ)、有薑(シュウガ)、橘(タチバナ)、藁荷(ショウガ)、不知以為滋味」とある。現在のものと字体や意味が多少違い、また解説例も幾つかあるが、ここでは苧住昇著「邪馬台国植生考」の解釈によった。これらは、わが国南部に発達する暖温帯照葉樹林で、タブ、クス、カシ類の発達する林相で疎開地にはコナラ、クスギ、カエデの林が主体をなしていたと考えられる。

4) 大阪市の須恵器の窯跡は日本書紀に「茅渟^{ちぬのあがたすむら}陶邑」と記され、その木炭を分析した結果、最初の燃料はカシ類であったが、六世紀後半からアカマツがふえ始め、七世紀後半以降になると、ほとんどアカマツとなる。—西田正規著「和泉陶邑と木炭分析」

5) 日本書紀に「素戔鳴尊が髭を抜いて散らすとスギになり、胸毛はヒノキに、尻毛はマキに眉毛はクスノキになり、スギとクスノキは浮宝(船)とし、ヒノキは宮殿に、マキは棺にせよと教えた」とあるが、マツは含まれていない。

6) 開拓の進んだ八世紀も終りに近い奈良時代末に編纂された「万葉集」にマツの歌が76首も数えることができるようになる。急激にマツ林ができたことを告げている。

7) 日本の三景をなす、松島、安芸の宮島、天の橋立はマツが主役の景色であるが、日本人とマツの結びつきは古代からのものではない。しかし、風格ある樹木として、神宿る神木として、伝説や史実に固く結びついている。

以上の如く、各種の資料によって、日本列島の樹木の変遷を辿ることができた。

7. 自然分類による選定巨木種の考察

選定巨木種を自然分類によって系統的に配列し、それに国指定、富山県指定の巨木を付加して総合的に考察を加えた。

1) 巨木種の内容考察

(裸子植物門) ①イチョウー中国原産、神社仏閣の境内、乳房信仰、防火林として尊重、②マツー降神依代の吉祥木・鑑賞木として愛用、弥生時代から繁栄、③スギー化石学上、衰退期にある松柏類の中でマツ、スギのみ繁栄、古い地質時代に出現し、氷河時代を生き抜いた種(被子植物門) ④ブナ科の世界一北半球の暖温帯と冷温帯に生育する樹木の主体、落葉のブナ、ナラは冷温帯に、常緑のカシ、シイは暖温帯に分布、山地に生育するため未調査が多い。⑤ケヤキー日本の建築材は大方針葉樹であるが、ケヤキの使用は桃山時代以後、神社仏閣、民家の用材として重視、樹形の風格は巨木信仰の対象として畏敬。⑥カツラー深山の谷筋に自生、樹勢は旺盛、樹幹そう生、樹根から地下水湧出の傾向あり。⑦クスノキー古代より照葉樹林の主木として重視、樹齢は長く、生命力は旺盛。⑧サクラー国花として誇るサクラは日本文化と日本人の精神風土を培った。しかし万葉集にはウメの歌が104首、サクラが38首であったが、この渡来のウメからサクラにかわったのは平安時代からで、数々の名花が生れたのは室町、戦国時代はサクラ文化の開花期となった。さらに江戸時代には庶民の行事にとけこみ、サクラ文化の全盛期となり今日にいたっている。古代の農民は稲作予兆の花として親しまれ、崇敬されていた。サクラの語源についても、サは(イネの精霊)クラは神座のように(集まり、こもっている)の意味との説もある。⑨トチノキートチの種子は山村で、必ず保存して凶作にそなえとか、救荒用あるいは雪崩防止のため禁伐木となっている。ヨーロッパの都市を飾るマロニエは見事であるが、同じトチの仲間である。開花期の白花の集った花序の姿は見事である。

2) 巨木種の共通性の考察

これらの巨木が今日まで残存した第一原因は長寿の相を示す貫録と風格のある樹形によって畏敬の感を与えたこと。第二にはその巨木と人との結びつきがこまやかで、常々感謝の念で接していた。その内容とは、①農業作業の自然暦、予兆として開花開葉を注目、②採集時代の延長が今日に及ぶなど。これら樹木を生命源として崇敬していたこと、その他記念樹、奇蹟樹、標識樹など、どれも人間とのかかわりの深いこと、またサクラを除き、花木でなく、また環境区分では気候帯を代表する樹林帯の主木の王者が今日まで生き伸びているものと考えられ、今後各方面から、巨木の存在や将来のあり方を究明する必要がある。

第5表

選定巨木種の自然分類位置の件数一覧表

自然分類	国指定	巨木3	ベスト山	富山県	富山県	自然分類	国指定	巨木3	ベスト山	富山県	富山県
裸子植物門						いらくさ目					
そてつ綱						にれ科					
そてつ目						ムクノキ		1			
そてつ科 ソテツ	10					ケヤキ	20	21	5	65	
いちよう綱						(エノキ)	1				7
いちよう目						くわ科					
いちよう科 イチョウ	26	17		28		クワ	2				
						アコウ	3				
球果植物綱						ガシュマル		3			
いちい目						きんぼうげ目					
いちい科 イチイ	1	1				かつら科	6	12	1	4	
カヤ			2	2		くすのき科	21	46			
(ラカンマキ)				2		タブノキ			1	3	
まつ科 モミ	1	1	4			ばら目					
(カラマツ)			2			すずかけのき科(プラタナス)					2
マツ	13	1	19			ばら科	28	1	1	8	
(ゴヨウマツ)			2			(イスザクラ)					2
すぎ科 (コウヤマキ)	3					(ウワミズザクラ)					1
スギ	43	32	3	172		(アオナシ)	2		1	1	
ひのき科 ヒノキ						まめ科	1		1	1	
						(サイカチ)					
被子植物門						(フジ)	5		2		
〇子葉植物綱						むくろじ目					
離弁亜綱						かえで科 (カエデ)	3		2	4	
ぶな目						とちのき科	3	5	3	16	
ぶな科 ブナ				11		あおり目					
(コナラ)				2		しなのき科 (シナノキ)					1
ミズナラ	1					側勝胎座目					
(アカガシ)			2	2		つばき科		2	1		
(ウラジロガシ)			2	2		回旋花目					
イチイガシ	1					もくせい科 (ヒイラギ)	7		2		
スタジイ	5	2	1	6		てんにん目					
						みそはぎ科 (サルスベリ)			1	1	
						合 計	204	143	32	371	

8. 「新・とやま名木十選」の内容

とやまの名木を選出するに当り、読売新聞では広く県民の声を反映するために、一般からの推薦を募集したところ、各地から多数の応募があったので、次の選定基準によって討議を行って決定した。選定基準

- ① 幹回り3メートル以上 ② 健全な生育状態 ③ 優れた樹木の姿形
 ④ 地方人との密着性 ⑤ 由緒の有無など ⑥ 本県の風土にふさわしい樹木
 ⑦ 隠れた名木の掘出しなど、天然記念物指定などに捉われることなく取捨選択を行った。

名 称	所在地	樹 高	幹 廻 り	推定樹齡	指定
今山田の大カツラ	山田村今山田	3.0	1.4	700	県
上日寺のイチョウ	氷見市朝日本町	3.6	1.2	1,300	国
踏み出しのトチノキ	朝日町大平	3.5	6.4	700	なし
宮川の大ケヤキ	上市町若杉	4.2	1.1	1,600	県
縄ヶ池の千年杉	城端町蓑谷山	2.6	1.1	800	なし
立山旧登山道の夏椿	立山町芦峯寺	3.0	4.2	300	なし
謙信手植えの松	黒部市生地経新	1.9	6.0	400	市
老谷の大ツバキ	氷見市老谷	6.7	2.4	700	県
野積の左巻きカヤ	八尾町水口	1.9	2.8	700	県
五鹿屋の大カエデ	砺波市五郎丸	5.2	2.2	300	なし

選定委員を代表して、私は次のような感想を述べた。「苦労したが、結果として樹種、地域ともバランスよく選定できた。踏み出しのトチノキ、縄ヶ池の千年杉など、これまで知名度は低かったが、すばらしい木の“再発見”もできた。今まで気づかなかっただけ。謙信手植えの松、宮川の大ケヤキの貫録、住民の心の支えとなっている五鹿屋の大カエデなどいろいろのものがそろった。さらに、今回、サクラは選ばれなかった。明日（あけび）の大桜（宇奈月町）、駒つなぎ桜（氷見市）など立派な名木が最後まで残ったが、老化がハンデとなって、最終的には外れた。国指定されている利賀村の二本のトチノキも、同じ理由で漏れた。樹勢のあるものを優先させた。なお、名木にはそれぞれ由緒、歴史があり、それにまつわる住民との深いかかわりがある。あらためて光を当てて、見直してもらえば幸いである。

A. 富山県指定の巨木

おわりに

野外の自然探求が好きで、今も続けることが出来ることを有難く思っている。富山第一高校に務めている時に「自然学習に賭ける人生」と題して、拙い小冊子をつくったが、その気持は今もかわらない。野外に出ると古めかしい風格を備えた、堂々たる巨木にしばしば接した。特に富山県文化財審議会委員となって、植物部門を担当することになって、直接、巨木を調べるようになってからは、巨木の在り方について深く考えるようになり、「巨樹・名木とその特性」を書く動機ともなった。その後はいろいろな機会を捉えて、全国各地の巨木と出合いが多くなってきた矢さき、環境庁の自然環境保全基礎調査にも協力することになり、その結果をまとめられた速報を手にするによって、今後、この巨木調査の内容を会員や一般の方々にも知って頂き、さらにこの巨木調査の重要性を高めることを目的として、次にあげる項目によって本文を書き進めた。

「巨木の所在とその特性—全国および富山県」

目 次

- 環境庁の調査巨木基準と測定要領 1) 調査対象基準 2) 巨木の測定要領
- 巨木の樹種と所在 1) 全国巨木ベスト10の樹種と所在 2) 環境庁の調査所見
 3) 都道府県巨木ベスト3の調査所見 4) 環境庁の総合所見
- 巨木の樹種に対する考察 1) 気候区分による巨木10ベストの考察 2) 巨木10ベストと巨木3ベストの比較考察
- 富山県巨木の現況 1) 富山県巨木ベスト10の状況 2) 全国ランキングの富山県巨木の状況 3) 富山県の巨木樹種と立地環境
- 選定巨木樹種の分布と語源の考察 1) 全国の部 2) 富山県の部
- 樹木分布の時代的変遷
- 自然分類による選定巨木種の考察 1) 巨木種の内容考察 2) 巨木種の共通性の考察
- 「新・とやま名木十選」の内容

以上の段階を踏まえて、巨木のあれこれと探って来たが、巨木の持つ威厳と神秘性に対してはただただ頭の下がるのみで、この巨木の持つ無限性から、日本の歴史や文化を汲みとると同時に将来を導びく指標として、常に巨木に接し、心をあらたにしたいものと思っている。

最後に本文を書くにあたり、環境庁の巨木調査に対する企画と調査結果の速報に対して、衷心よりそのご努力に対し、感謝申し上げますと同時に、その他の関係機関からご指導を賜ったことに対し、深くお礼申し上げます。

参 考 文 献

牧野和春	1933	巨樹の民族学	恒文社
岩田利治, 草下正夫	1952	邦産松柏類図説	産業図書KK
本田正次, 林 弥栄	1974	日本のサクラ	誠文堂新光社
環境文化研究所	1975	緑化対策の基礎知識	ぎょうせい
上原敬二	1975	樹木大図説 I, II, III	有明書房
桐野秋豊	1976	日本のツバキ—ふるさとと品種	主婦の友社
居初庫太	1977	花の歳時記	淡交社
高橋 進	1982	風景美の創造と保護—風景学序説	大明堂
岡村はた, 橋本光政, 室井緯	1982	図解植物観察事典	地人書館
満久崇磨	1983	木のはなし	思文閣出版
高嶋雄三郎	1983	ものと人間の文化史 16・松	法政大学出版局
沼田 真	1984	日本の天然記念物 5 植物Ⅲ	講談社
筒井迪夫	1985	木と森の文化史	朝日新聞社
田中敏之	1985	かがのと巨樹名木探訪	北国新聞社
八木下弘	1986	巨樹 (801 講談社現代新書)	講談社
坪井洋文	1986	民俗再考—多元的世界への視点	日本エディタースクール出版部
斉藤正彦編	1987	森と文化	東京大学出版会
足田輝一	1987	樹の文化誌	朝日新聞社
永瀬嘉平	1987	百木巡礼	佼成出版社
本多啓七	1987	立山スギの特徴と生態	植物地理・分類研究 35-2
本多啓七	1988	巨木・名木とその特性—全国および富山県	第一共同印刷KK
深津 正・小林義雄	1985	木の名の由来	太平社
三島昭男	1988	縄文杉は訴える	新潮社
佐々木高明・丸山利夫	1988	畑作文化の誕生—縄文農耕論へのアプローチ	日本放送出版協会
アンソニー・ハックスリ	1988	緑と人間の文化	東京書籍
麓 次郎	1988	四季の花事典—花のすがた 花のこころ	八坂書房
高橋義人	1988	形態と象徴—ゲーテと「緑の自然科学」	岩波書店
牧野和春	1988	巨樹の民俗紀行	恒文社
畠山 剛	1989	縄文人の末裔たち—ヒエと木の実の生活誌	彩流社

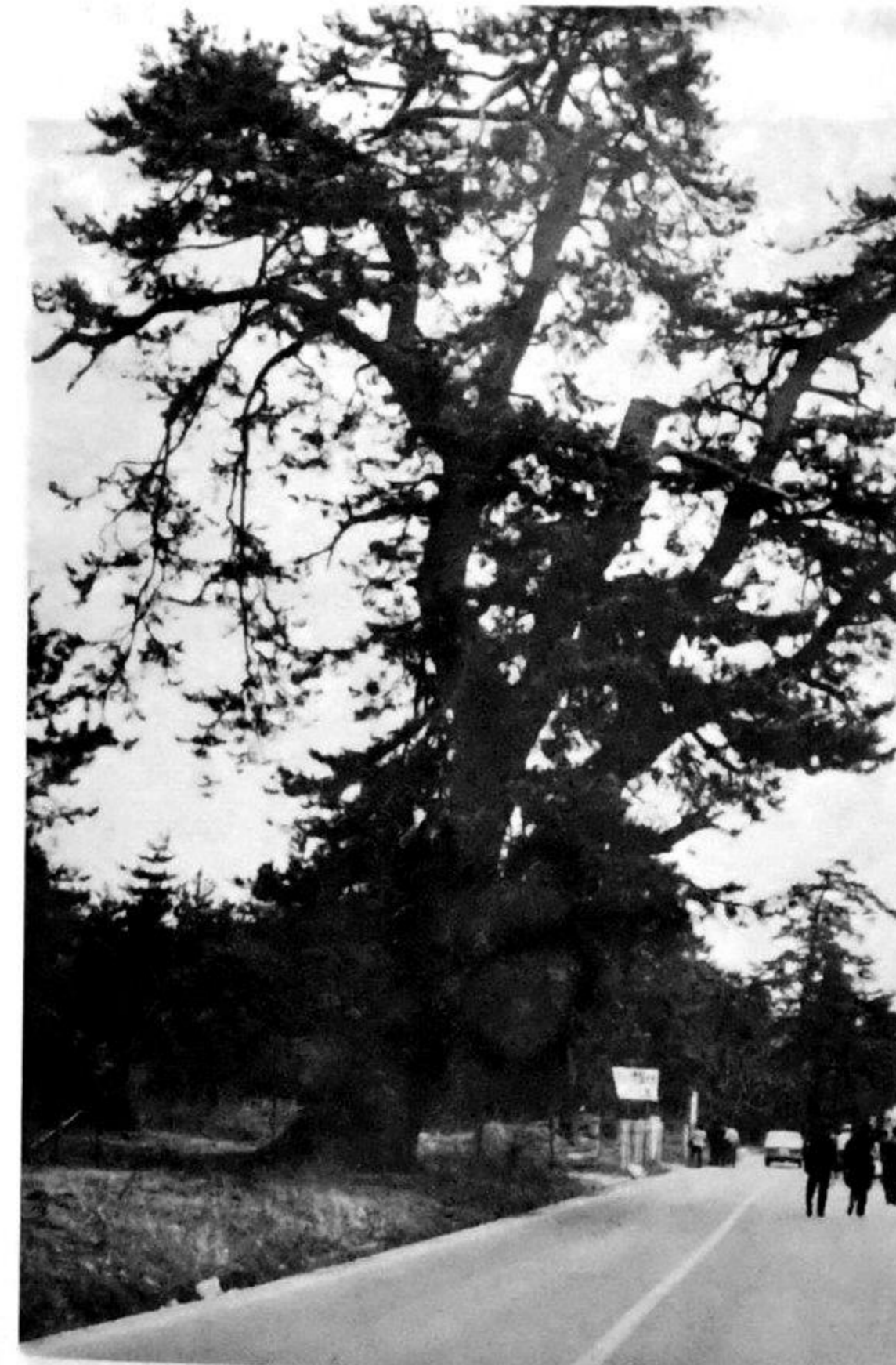
A. 富山県指定の巨木



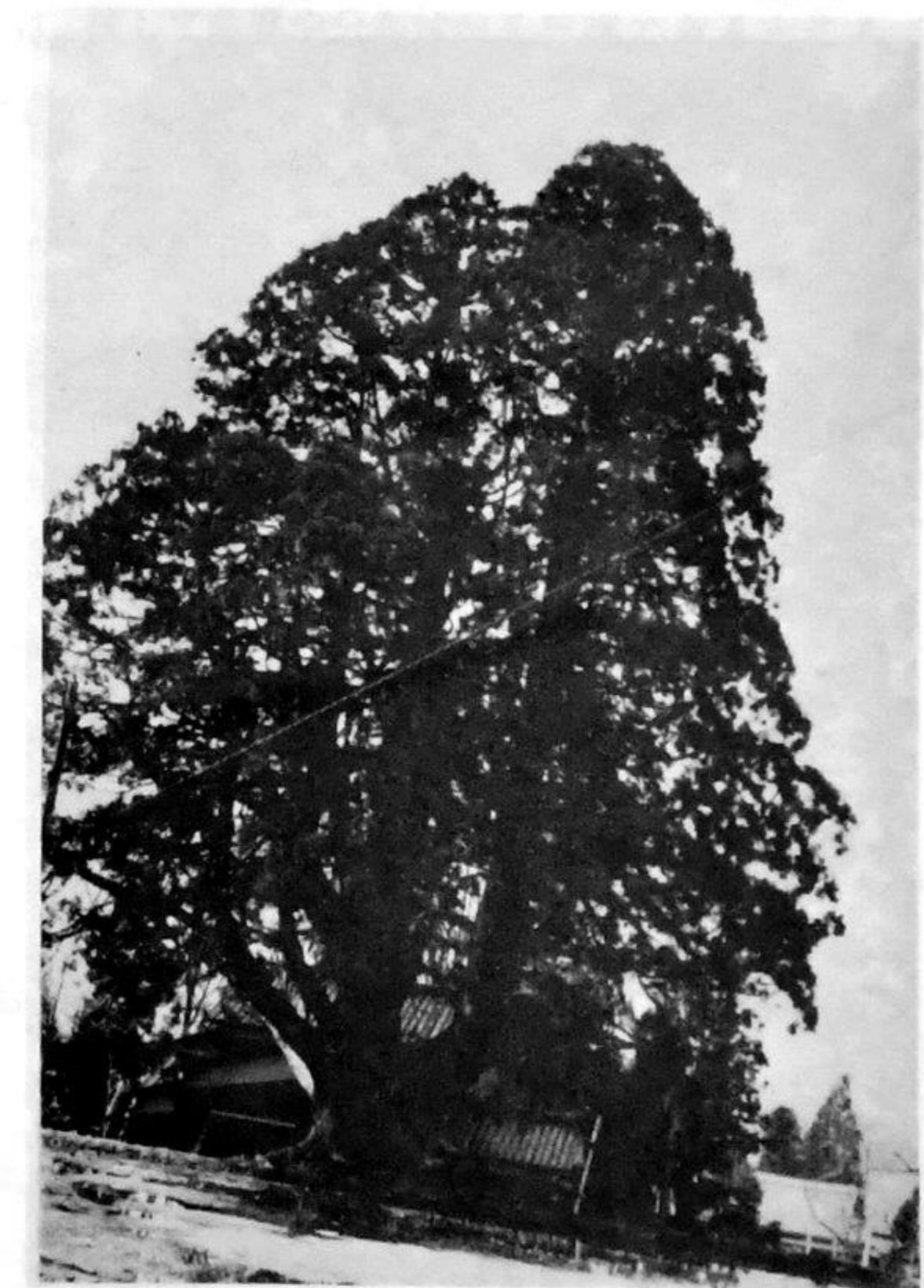
八尾諏訪社の大ケヤキ
(八尾町諏訪町)



坪野のつなぎがや
(魚津市坪野)

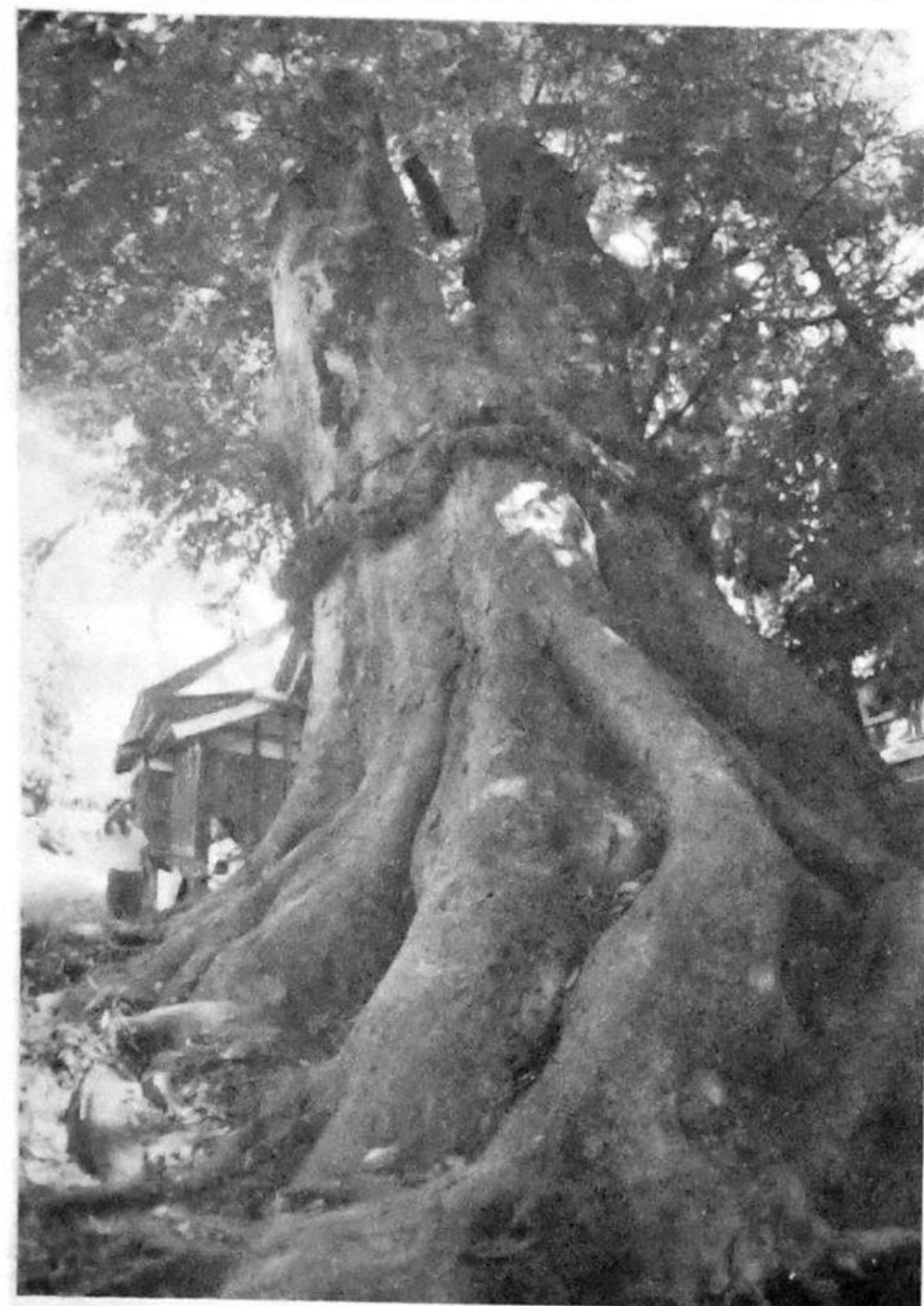


浜黒崎の松並木
(富山市浜黒崎)



大沢の地鎮杉
(魚津市大沢)

B. 富山県指定の巨木 (B.、C. は読売新聞社提供)



宮川の大ケヤキ
(上市町若杉)



今山田の大カツラ
(山田村今山田)

C. 新・とやま名木十選



踏み出しのトチノキ
(朝日町大平)



縄ヶ池の千年杉
(城端町蓑谷山)

富山県のトリカブト属標本*1

富山市科学文化センター 太田 道人

トリカブトの分類は、比較的難しいとされている。雑種が稔性をもって戻し交配を行ったり、倍数体が環境に応じて幅広い変異をするなど、極めて種の形が捉えにくいためである。実際、同定しようとして、検索表をたどってみても、とまどう箇所が多々ある。加えて正確な分布範囲が分かっていたため、われわれ素人には、なかなか正確な同定はできなかったのである。

最近、国立科学博物館筑波実験植物園の門田裕一氏によって、トリカブト属の再分類が行われた(門田,1989)。門田氏は、染色体レベルの知見も加えてトリカブト属を再分類すると共に、詳しい分布図も作成している。いくつかの論文のうち、特に富山県のトリカブトの分類、分布に利用価値の高いものは、「長野県のトリカブト類について」(門田,1987a)、「岐阜県産トリカブト属植物の分類と分布」(門田,1987b)、「A Revision of *Aconitum* Subgenus *Aconitum* of East Asia. (東アジア地域のトリカブト属トリカブト亜属の再分類)」(門田,1989)であろう。

筆者は、富山県産の標本を同定している限りでは、門田氏の再分類が比較的自然而、検索表も使いやすいと考えたため、これらの文献に従い、富山市科学文化センターの標本と金沢大学の標本の1部を再同定してみた。その結果、7種の存在が確認された。ただし、調査できた県内産の標本数は、わずかに38点で、個々の種類については、決して変異や分布状況を把握できるところまでには至っていない。今後共、資料の収集を続けて知見を増やしていかなければならないと思っている。

科学の進歩で、植物を区別するためのより高度な手段が提供されるにともない、より種の実態に近い分類が可能になっていく。このような再分類や再検討は、基礎となる標本が残されていて初めて可能となるものである。改めて標本の重要さが感じられる。たくさんの標本を富山市科学文化センターに寄贈された下記の方々に深く感謝申し上げる次第である。故進野久五郎氏、故吉沢庄作氏、富山大学教育学部教授長井真隆氏、元金沢大学理学部教授里見信生氏、富山県自然保護協会事務局長本多啓七氏。

今後とも、諸兄の貴重な御意見や情報を賜りますよう、この場をかりてお願い申し上げます。

標本NoのうちSpを冠した番号は富山市科学文化センター種子植物標本登録番号(Toya-Sp)、KANAは金沢大学理学部植物標本番号である。なお、参考のため門田1989に引用されている各標

*1 富山市科学文化センター研究業績第81号